

自 己 評 価 表

教育方針	<p>1 高い知性と豊かな創造性を身に付け、新しい文化の発展に貢献する人間を育成する。</p> <p>2 高い道義心と公正な判断力を身に付け、人類の福祉増進に寄与する人間を育成する。</p> <p>3 たくましい気力・体力を身に付け、平和な国家社会の実現に努力する人間を育成する。</p>	重点目標	<p>生徒を励まし可能性を広げ、地域の負託に応える教育の実践 —徹底した個人指導から、さらなる高みへ—</p> <p><育てたい人物像></p> <ul style="list-style-type: none"> ○自己を鍛え、困難に打ち勝つ力(レジリエンス)を備えた社会に貢献できる人材 ○個性を伸ばし、自他ともに尊重し、支え合うことができる人材 ○輝かしい伝統を受け継ぎ、新たな創造を切り拓く、グローバル社会で活躍できる人材 <p><生徒に身に付けさせたい力></p> <ul style="list-style-type: none"> ○高い志を持ち、自らを律して粘り強く努力する力 ○相互に思い遣る心を持って自他ともに高め合う力 ○世界的視野を持って考え、行動できる力 		
領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
学校経営	教育目標達成のための実践	<p>本年度の重点目標の達成に向け、創意工夫しながら実践に励む。担任による個人面談を1,2年生一人年間10回以上、3年生一人年間15回以上を目指す。</p> <p>A:10回以上 B:9回 C:8回 D:7回 E:6回以下 A:15回以上 B:14~13回 C:12~11回 D:10~9回 E:8回以下</p>	D	<p>教職員対象の教育業務の自己評価における「進路展望を形成するため生徒との面談機会を多く作るよう努めている」の項目が昨年度より0.4ポイント下がった。担任による個人面接回数は、1・2年生が平均7.1回、3年生が8.7回であった。数値的には十分なものではないが、学校生活で気になる生徒等には丁寧に面談を重ねている。模試の結果等を個別に返却する際にも声掛けや励ましを続けるなど、数値以上のものが実践されている。</p>	<p>生徒に高い進路目標を持たせ、その実現に向けて働きかけることが、本校の最も重要な教育目標の1つであり、そのためには個人面談が重要である認識を全教職員で共有する。また、近年、生徒の多様化により、より細やかな指導や観察が必要になっていることから、学校生活アンケートの実施に伴い面接週間を設定した。</p>
	働き方改革に対する教職員の意識改善	<p>目標チャレンジ制度を活用し、幸福感を伴う働き方について意識を高める。自己評価において、評価の平均値が3.3以上となることを目指す。</p> <p>A:3.5以上 B:3.3~3.4 C:3.1~3.3 D:2.9~3.0 E:2.8以下</p>	C	<p>目標チャレンジ制度における、上半期の自己評価の平均値は3.2であった。ほぼすべての教職員が3以上の評価点を付けていることは安心できるが、仕事の達成感をもっと高めていく必要がある。勤務時間については、時期によっては多くなっているが、ICT機器の活用等によって効率的な働き方を目指す意識は高くなっている。</p>	<p>勤務時間を減らすことだけを目指すのではなく、教職員の仕事に対する充足感を高めたい。そのためには業務の精選と効率化、協力体制の強化に努めたい。目標チャレンジ制度の適切な目標設定と取組、適切な評価によるPDCAサイクルを充実させ、やる気高め、幸福感を伴う働き方につなげていく。</p>
	円滑な組織運営	<p>業務の精選と情報の共有化を図り、連携協力しながら自己の評価ポイント平均8.5以上を目指す。</p> <p>A:8.5ポイント以上 B:8.4~8.3ポイント C:8.2~8.1ポイント D:8.0~7.9ポイント E:7.8ポイント以下</p>	A	<p>教職員対象の教育業務の自己評価における「校務分掌において、他と連携強調して自分の役割を果たしているか」の項目が昨年度より0.3ポイント向上し8.9ポイントであり、連携協力が果たされている。保護者や地域中学校に情報を発信し、連携して教育活動にいかしているかの項目も昨年度より0.4ポイント向上しており、ホームページに対する保護者の満足度も0.2ポイント向上している。</p>	<p>情報の共有と連携協力については、ICT機器の活用をさらに進めて一層の向上を図りたい。大きな学校が陥りやすいセクショナリズムを阻止するために管理職が中心になって各課や学年の協力体制をさらに充実させる。ホームページの充実については、昨年度の反省を踏まえて取り組み、一定の成果が出ているが、今後も一層の工夫に努めたい。</p>
	施設設備の安全管理の徹底	<p>施設設備の安全点検を定期的に行い、保護者アンケートの当該項目に関する評価7.5以上を目指す。</p> <p>A:7.5以上 B:7.4~7.2 C:7.1~6.9 D:6.8~6.6 E:6.5以下</p>	A	<p>定期的に安全点検を行い、予算の範囲内で可能な対応を迅速に行った結果、学校施設・設備の利便性や安全性について7.7の評価となった。</p>	<p>定期的な安全点検を続けるとともに、計画的・効率的な安全対策に取り組む。さらに高い目標を掲げ、評価ポイントを各々0.5ポイント上げて取り組むこととした。A:8.0以上、E:7.0以下。</p>

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

自己評価表

愛媛県立松山東高等学校 No.2

学校番号(20)

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
学習指導	家庭学習の充実	1、2年生は180分以上、3年生は330分以上の家庭学習習慣を形成し、主体的に学ぶ力を身に付ける。 A：180分以上 B：160分以上～180分未満 C：140分以上～160分未満 D：120分以上～140分未満 E：120分未満 A：330分以上 B：310分以上～330分未満 C：290分以上～270分未満 D：270分以上～290分未満 E：270分未満	B	第1回家庭学習時間調査期間の達成状況は、1年生「B」、2年生「C」、3年生「E」であった。第2回では、1年生「A」、2年生「A」、3年生「C」であった。第3回では、全学年で「A」であった。第4回では、1年生「D」、2年生「C」、3年生「B」であった。以上の結果から、達成状況の学年ごとの総合評価は1年生「B」、2年生「B」、3年生「C」で、学校全体の総合評価は「B」である。	3年生の達成状況が、1・2年生を下回った。学校行事の中心的存在として忙しい日々を送る1学期間中は、受験生モードに入り切れていない現状が浮かび上がる。一方で、全学年が「A」であった第3回調査期間中の3年生の学習時間平均は目標数値を60分上回っており、3学年の中で最大値の上回り幅であった。第3回調査期間は夏季休業中であり、授業のない期間、個々の目標に向かって自律的・主体的に学習に取り組む本校生の姿が見て取れる。こういった学校や生徒の特色を理解し、一年間を見通して、どの時期に何をやるべきか、生徒個々の実態に即した学習アドバイスや学習材料を与えられるよう、各教科で研究を重ねたい。
	教科指導の充実	授業公開週間や各教科の研究授業、教科会等の機会を活用し、お互いの取組を共有し、各教員の授業力向上を目指す。	B	授業公開週間における相互授業参観はやや低調であった。その一方、来年度からスタートする新教育課程や観点別評価に向けて教科会や教科指導委員会では活発な情報交換がなされ、またICTを活用した授業形態に関しても教員間で素材や手法を共有し、教えあう姿が見られた。数学の研究授業では、Teamsのホワイトボード機能や授業動画をを用いた主体的で協働的な学びを実現する実践が行われた。	新教育課程と観点別評価については、始動してからも常に点検・改善・見直し等の微調整が必要である。教科内や学校全体で話し合う場が増えるよい機会と捉えて、これまで以上に教科会や研究授業、授業公開週間等を活用して情報共有を行い、主体的・対話的で深い学びを実現できる授業力向上に教科や学校のチームとして取り組んでいきたい。
生徒指導	交通安全指導の充実	学校と保護者・地域の方々との連携を深め、安全通学への啓発活動を積極的に推進していくとともに、交通ルールの遵守とマナーアップの向上を図る。特に「自分の身は自分で守る」の教訓を生かし、年間の交通事故の件数を15件以下にするよう指導する。	B	校外から交通マナー（自転車通学のマナー）についての指摘は大幅に減少したが、交通事故の件数については、16件で目標を上回ってしまった。大事故にはならなかったが、交差点での接触事故は多い。事故処理は適正にできていた。	交差点での事故を減らすために、一時停止・徐行など交通規則の順守を徹底させ、事故件数を15件までにしていきたい。また、自転車のみならず公共交通機関での乗車マナーなど社会に適應できる人間としての意識を高める教育を推進したい。
	基本的生活習慣の確立	集団生活に必要な規範意識の向上を図り、自律する能力を培い、基本的生活習慣をより一層自分に合ったものにできるように具体的な行動目標を設定し、実行させるよう指導していく。1か年皆勤率を60%以上とし、10分前行動の徹底を図る。 A：60%以上 B：59%～55% C：54%～50% D：49%～45% E：45%未満	B	8:15を過ぎて登校する生徒が減少するなど、基本的生活習慣が身に付いてきたように思われる。しかしながら、まだ十分とは言えず、今後、より一層の指導が必要である。	基本的生活習慣について考える機会を持たせ、登校時刻を5分早くするなど、時間にゆとりが持てるよう家庭に協力を要請する。「朝の読書」時には、全員が登校できているよう指導をしていきたい。身だしなみ等の自律については、生活自律週間において、各HRを利用して、意識を高める指導をしていきたい。
進路指導	進学指導の充実	東大、京大等の国立難関大学、国公立大学医学部医学科の合格者数80以上 A：80名以上 B：79～70名 C：69～60名 D：59～50名 E：49名以下 (現役生の合格者数では、国立難関10大学50名以上、国公立大学医学部医学科10名以上を目指す)	A	国公立大学前期試験の合格発表終了時において、東京大の合格者数は4名、京大の合格者数は11名であり、国立難関大学と国公立医学部医学科の合格者は、それぞれ60名と20名であり、難関大合格者数は80名である。その内、現役生の合格者数は国立難関10大学58名、国公立医学部医学科9名と共通テストの難化及びコロナ禍という状況において健闘している。後期終了時で、難関大合格者数は88名となった。	二次力向上に向けて、基礎基本の定着を図り、早期に国数英の学力の向上に努める。そのために、1・2学年における弱点教科の学力向上を行う。教科や学年など教員の組織力を高め、常に二次の学力強化を意識して指導する。生徒には「受験は団体戦」という意識を持たせ、高い目標を持った集団として学力の向上を図る。 1年次から、松山東高生であることを自覚させ、基本的生活習慣をしっかり和確立させるとともに、逆境にも負けない強い精神力を育成する。さらに、状況に応じて、個に応じたきめ細やかな指導や面談を行い、目標を高く持たせて、あきらめないという気持ちの育成と学習する意欲や態度を醸成させる。
		早稲田、慶応、上智、関関同立等、私立難関大学延べ合格者数250名以上 A：250名以上 B：249～230名 C：229～210名 D：209～190名 E：189名以下	A	早稲田大7名、慶応大4名、上智大7名、明治大7名、青山学院大4名、中央大6名、同志社大54名、立命館大124名、関西大42名、関西学院大50名など、私立難関大延べ合格者数は312名である。共通テストの難化や安全志向の影響、さらにはコロナ禍による地元志向の中で、一人一人の努力の成果が出た結果と考える。	私立難関大合格者は、国立難関大志望者でもある。目標の難関国公立大の合格に向けて、共通テスト対策では各教科ともバランスのよい学習をさせること、二次試験対策においては国数英の各教科において、論理的思考力を身に付けさせるなど、最後まで目標を高く持って、受験教科を早くから絞らせないようにする。
		国公立大学合格者数250名以上 A：250名以上 B：249～230名 C：229名～210名 D：209名～190以上 E：189以下	A	前期試験合格発表時点で、国公立大合格者数は196名である。コロナ禍にも関わらず、広い視野をもって受験している。合格者数を見ると、共通テストの難化およびコロナ禍などの影響もあり、減少した。後期試験を含め、261名の合格者数となり、最終的に目標を達成することができた。	入試は団体戦であるので、学校の進路指導方針を徹底し、教員の意識統一のもと、粘り強い指導を継続していきたい。生徒に松山東高生であることを自覚させ、東京大や京大など難関大学や医学部医学科の合格者数を伸ばしたい。また、基本事項を正確に把握し、題意を正しく把握するための読解力を養うなど、基礎・基本の定着に向けて指導を徹底し、岡山大・広島大等の中堅大学の受験者数・合格者数も増やしたい。共通テストと二次試験のバランスを考えた指導、さらには「二次で逆転」という気持ちを持たせることができる教科指導・進路指導をしていきたい。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
特別活動	ホームルーム活動の充実	主権者教育など新しい内容を研究し、さらに発展した活動が展開されるよう担任を援助するとともに、生徒の自発的・自治的活動を助長し、より良い人間関係を形成できるホームルーム活動を確立する。	A	各ホームルーム担任の創意工夫と生徒たちのアイデアなどにより、本校の特色を生かした活動が展開された。また、ホームルームでの活動を基本としてより良い人間関係を構築することができている。	計画的かつ系統的な活動が展開されるように、学年主任、ホームルーム担任を支援していきたい。また、成年年齢引き下げによる消費者教育の充実に向けて、人権教育課や地歴公民科との連携をさらに深めていきたい。
	生徒会活動の充実	生徒会執行部の役割を明確にし、さらに自主的な活動ができるように支援していく。そのためにも生徒会役員との連携をさらに深めていく。また、生徒会委員会の活動をより活性化し、生徒主体の活動が展開されるように支援していく。	B	リモートでの集会など、例年と異なる環境の中での活動が増えたが、担当教員との連携をとりながら、積極的に活動できた。また、委員会活動も担当教員の工夫により、主体的な活動がなされている。	次年度以降リモートでの活動など、様々な工夫を必要とすることが考えられる。生徒会執行部のバックアップをしっかりと行い、主体的な活動が引き出せるように支援していきたい。また、特活課だけではなく、様々な部署及び教職員との連携を強化し、生徒会活動を充実させていきたい。
	学校行事の充実	学校行事の特性や狙いを明確にし、本校ならではの伝統的な校風を継承・発展させていく。また、集団の中でリーダーシップやフォロワーシップを発揮させるとともに、マネーアップを図る。そのためにも、生徒が学習活動や部活動とのバランスをとりながら、積極的に取り組めるような支援を行っていく。	B	コロナ禍における学校行事の進め方を模索する1年であった。様々な制約の中での学校行事ではあったが、教職員や生徒の協力により、充実した活動が行われた。	制約が多い中でも、各種行事の意義を再確認しながら継承・発展させ、生徒たちがリーダーシップとフォロワーシップを学び、学校の一員としての役割を自覚させたい。また、部活動とのバランスに留意し、学校行事に参加しやすい環境を整えるために、部活動顧問とも連携していきたい。
	部活動の充実	学習活動や学校行事とのバランスを考慮しながら顧問と生徒が一体となった「質の高い文武両道の実践」を目指すとともに、総合的な人間力の育成にも重点を置き、毎日の活動を充実させていく。 A: 全国大会出場10種目以上 B: 8種目以上 C: 6種目以上 D: 4種目以上 E: 2種目以上	A	11の部活動で31種目(運動部10種目・文化部21種目)が全国大会に出場した。その内、将棋部が日本一に、入賞も7種目と非常に優れた成果を収めることができた。	本校伝統の「質の高い文武両道の実践」を継承していく。そのために顧問と生徒の意思の疎通を深め、効率的な活動を推進していく。また、本校の「部活動における方針」をもとに、コロナ禍における活動の在り方を工夫し、毎日の活動を充実させるとともに、総合的な人間力の育成に重点を置き活動していきたい。
保健・安全管理	健康教育の充実	生徒一人一人の健康状態を確実に把握し、健康の維持・増進を図るとともに、健康診断結果による事後措置の徹底を図り、心電図・尿検査受診率を上げる。 A100% B95%以上 C90%以上 D85%以上 E 85%未満	B	健康診断・保健調査票などをもとに個人面談をし、生徒の健康状態の把握に努めた。また、夏季休業・冬季休業前には、保護者懇談の機会をとらえ、保護者にも連絡した結果、一定の効果をあげ、95パーセント以上の受診率となった。	生徒の健康状態については、担任・学年主任との連携を密にし、保健室利用時などに細心の注意をはらい、迅速かつ丁寧な対応を心がける。保健委員会の活動においては、毎回の委員会を生徒委員主体で行わせ、自他の健康管理に積極的に取り組ませたい。
		保健だよりや保健講話を通して保健指導の機会をつ確保し、自らが自分の健康を管理・改善していく実践力を身に付けさせる。	B	6月に「コロナに負けない心とからだの整え方」と題し、1、2年生を対象にリモートによる講演会を実施した。また、保健委員をリーダーとし、保健だよりを利用して感染回避行動について呼びかけさせた。	本校生徒の実態を把握し、生徒の抱える健康課題を見出して、必要な保健講話や興味関心を引く保健だよりの作成にあたる。

※ 評価は5段階(A:十分な成果があった B:かなりの成果があった C:一応の成果があった D:あまり成果がなかった E:成果がなかった)とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方針
保健・安全管理	教育相談の充実	定例会で生徒の状況について協議し、学年団と連携して組織的に対応する。学校生活アンケートを学期に1回ずつ実施し、担任の面談・配慮を要する生徒への教育相談担当者の面談を確実に実施する。「教育相談だより」を年間5回発行し、生徒が心身の状況を客観的に見つけ、相談しやすい状況を作る。また、スクールライフアドバイザーからの情報発信を行う。	B	定例会で生徒の状況について協議し、学年団と連携して組織的に対応した。学校生活アンケートを学期に1回行い個別指導を充実させ、配慮を要する生徒に迅速に指導・助言を行うとともに、必要に応じて継続的な指導を行っている。「教育相談だより」を長期休業明けを中心として年間5回発行し、相談しやすい雰囲気を作るとともに、S L Aからの情報発信も行った。	生徒個人面談強調週間を設け、学校生活アンケートを利用した個人面談がスムーズに行われ、さらに、学校全体が連携・創意工夫してそれをバックアップする体制を作る。「しなやかで折れない心」を作る指導を生徒・保護者に発信する。社会情勢や生徒の変化を迅速にキャッチして、指導に生かせるように情報発信・体制づくりを行う。
		特別支援教育校内委員会を通じて校内支援体制を確立し、生徒指導に関する共通理解を図り、年間1回以上職員会において報告を行う。「教育相談だより」を通じて多様性の尊重について啓発する。配慮を要する生徒について迅速に対応する。	B	特別支援教育校内委員会を通じて校内支援体制を確立し、生徒指導に関する共通理解を図り、職員会において報告を行った。「教育相談だより」を通じて多様性の尊重について啓発した。教育相談定例会において、配慮を要する生徒について共通理解を図り、ケースに応じて組織的に迅速に対応した。	「教育相談だより」や研修の内容をさらに充実・深化させて、多様性の尊重という文化を校内に根付かせ、教員の意識と知識・技能をさらに高める工夫をする。
	環境の整備と美化の推進	ゴミの分別を徹底し、ゴミの削減に努める。ゴミ袋の使用枚数を昨年度より10%減らすことを目標にする。	B	ゴミの分別については、美化委員が中心となって文化祭やHRなどで啓発活動を行えた。	行事の度に落とし物や忘れ物が増えて、最終的にそれらがゴミとなる。次年度は、持ち物に記名することを徹底させたい。
		掃除用具や備品を定期的に点検・整備し、整理整頓をすることで、効率の良い清掃活動に取り組めるようにする。	B	美化委員による清掃用具の点検を定期的に行い、備品や用具の数を記録することで全体の把握ができた。	清掃用具一覧表を作成し、次年度は更に備品や用具の管理を徹底し、無駄のない効率の良い清掃活動が行えるようにしたい。
	環境美化に関する意識を高めることで、生徒自らが自主的に清掃活動に取り組もうとする学校を目指す。10分間全力清掃。	B	意識を高めるための啓発活動が足りないからか、10分間全力清掃を全員は達成できていない。	次年度は放送部5分前アナウンスで移動し、チャイムで清掃開始を徹底させたい。	
	危機管理マニュアル・防災避難訓練のあり方を各学期ごとに見直し、発災時を想定した地域との連携を図る。また、生徒課をはじめ各課とも連携し、安全な学習環境の構築と安全教育に努めて、災害・事件・事故発生時に迅速・的確に対応できるようにする。	B	危機管理マニュアルの見直し、備蓄品の入れ替え・補充、危険個所のリストアップと補強、避難所開設に関する地域との連携等、学校安全を推進することができた。	危機管理マニュアル・防災避難訓練のあり方を随時見直すとともに、教職員間で知識を共有できる仕組みを作る。地域との連携を図り、防災意識の高揚と安全な学校環境の構築に努め、災害・事件・事故発生時に迅速・的確に対応できるようにする。	
人権教育	人権問題学習の充実	「部落差別の解消の推進に関する法律」の趣旨と内容を生徒・教職員に周知徹底させ、人権便りを発行する。	B	人権・同和教育ホームルーム活動で生徒への周知を図った。3学期に人権便りを発行した。	引き続き、この法律の内容理解と課題についての周知徹底を図りたい。
	人権教育研修会の充実	新聞記事を中心に人権に関する資料作成に力を入れ、学期に1回教職員に配布する。	B	人権NEWSとして毎月、新聞記事を掲示し人権委員からの呼びかけを行った。教職員へはPDF化して掲示板で配布した。	教職員への配布回数を増やせるよう工夫したい。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。

領域	評価項目	具体的目標	評価	目標の達成状況	次年度の改善方策
図書活動	読書指導の充実	「朝の読書」の目的を理解させ、読書に臨む意識を高める。図書委員による「読み聞かせ」を学期に1回行い、内容の充実をはかる。読書会を活発にする。	B	「朝の読書」の活動について、定着はしてきているが、まだ完全実施といえる状況にない。学期に一回の「読み聞かせ」実施は達成できた。各クラスの協力もあり、概ね成功といえる。	引き続き、読書に臨む意識を高めるための取組を継続していく。「読み聞かせ」に適した教材の開拓と「読み聞かせ」技術の向上を図る。
		啓発活動を継続して行い、一人一か月2冊の読書を奨励し、学校全体で年間20,000冊以上の読書を実践する。 A : 20,000冊以上 B : 19,999冊～18,000冊 C : 17,999冊～16,000冊 D : 15,999冊～14000冊 E : 13,999冊以下	A	各クラス担任の声掛けと、図書委員による読書推進の呼びかけ、新着図書の紹介などの地道な活動により、何とか目標の年間20,000冊以上の読書を達成することができた。	図書委員や学年会での連絡を通じて啓発活動を行っているが、昨年度よりも年間読書冊数は減少した。楽しい図書館企画や読書冊数を増やすためのアイデアの募集などを通して改善を図る。
	図書館活動の活性化	図書委員会活動を活発にし、図書館内の展示・掲示を毎月更新する。「図書館だより」の毎月の発行および、年3回発行の「図書館報」の内容充実を図る。	B	図書委員会活動の一環として文化祭の展示を充実させ、図書館へ足を運ぶように促すことができた。コロナ禍の影響が図書館を利用する生徒の数は伸び悩んでいる。「図書館だより」の発行が遅れがちになった。	図書館利用の啓発に努めるとともに、魅力ある図書を増やし、快適な図書館環境を維持したい。図書館刊行物の充実を引き続き図り、定期的に読書啓発の取り組みを行う。お勧め書籍の紹介にも力を入れていく。
現職教育	校外研修の充実	他校への学校訪問と授業公開への参加を呼びかけ、積極的な参加を促す。さらにその報告会を実施することで、情報の共有を促す。	C	昨年度に引き続き、コロナ禍の影響を受け、研修の中止や短縮が相次いだ。一方、県内外からのオンライン研修の案内が多くあり、校内にいながらリモートで研修するというスタイルが増えた。	I C T機器を活用したオンライン研修の在り方をより深く研究し、効果的に校外研修が行えるようにサポートしていく。
	校内研修の充実	新しい学力観に基づき、主体的・対話的で深い学びができるよう校内研修内容の改善など研究に取り組む。校内研究授業、相互授業参観週間を効果的に生かし授業改善に努める。	B	昨年度に引き続き、コロナ禍の影響でアクティブ・ラーニングの視点での活動に制限があったものの、生徒一人1台端末を活用した授業やI C T機器を活用した授業に一層力を入れて取り組んだ。	教員、生徒ともにI C Tを活用した授業に慣れてきた。しかし、今後もI C T機器の活用や主体的・対話的で深い学びにつながる効果的な授業の研究ができるよう、校内研修の充実や相互授業参観週間の効果的な活用を一層図っていききたい。
P T A 活動	P T A 活動の充実	総務・文化・生活指導・保健厚生・進路指導の各委員会の理事を中心に意欲的に行われているPTA活動に、一般保護者が参加しやすい活動を模索(PTA総会参加率を20%以上)し、活動の活発化を図ることで、生徒にとってより良い教育環境を作ることを目指す。特に今年度はコロナウイルスの影響による活動の縮小が求められているが、内容の充実度は維持したい。	A	コロナウイルス感染症の影響がある中、各委員会とも数少ない活動において意欲的に企画・活動が行われた。役員を中心に充実した活動を実施できていた。P T A総会も書面開催としたが回答の回収率も92%と高い数字となった。P T A理事、自らのI C T機器の活用も活動の活発化に寄与していると感じる。	今年度もコロナウイルス感染症の影響から、昨年度同様のP T A役員研修や文化祭・運動会での催しであったが、昨年度の改善策を生かした活動となり充実していた。再開後は、従来からの課題である一般保護者が参加しやすい、より良い教育活動を模索・展開していきたい。
		「明教通信」を年4回、「明教便り」を年12回発行することにより、保護者に必要な情報を伝えるとともに、本校保護者の本校教育への興味を喚起したい。	B	コロナウイルス感染症の影響で行事が制限された中、各媒体とも、工夫して発行されており、年4回、年12回の発行を達成でき、保護者に生徒の活動予定、状況を的確に伝えることができた。	昨年度と本年度を良い機会ととらえ、今後の在り方を検討することで、本校の魅力をより伝えることができるよう更なる内容の充実を図りたいと考えている。特にH Pの充実を検討したい。

※ 評価は5段階（A：十分な成果があった B：かなりの成果があった C：一応の成果があった D：あまり成果がなかった E：成果がなかった）とする。